



Title	Australia-Japan Graduate Conference 2015に参加して
Author(s)	鹿野, 由行; 中山, 良子
Citation	日本学報. 2016, 35, p. 287-290
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55490
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Australia-Japan Graduate Conference 2015 に参加して

鹿野由行、中山良子

日本学研究室に博士後期課程の学生として在籍する鹿野由行と中山良子は、2015年8月2日から6日までオーストラリア国立大学を中心に開催されたAustralia-Japan Graduate Conference 2015に参加した。同Conferenceには昨年度も関西学院大学の辛島理人先生のご指導のもと日本学研究室から3名の大学院生が参加している¹⁾。

今年度は、カリキュラムの都合で辛島先生の「日本学演習」(日本研究を国際的に展開するためのアカデミック・スキルの習得を目的とする授業)が後期に配置されていたため、Conferenceの前に受講することが出来なかった。そのため、辛島先生には別途お時間をとっていただき、英語での発表を入念に指導していただいた。

院生にとって海外での発表は、自身の研究について新たな視点から助言を得ることのできる貴重な機会である。しかし、皆が頭を悩ませるのはその費用についてであろう。今回は、幸いなことに、二人とも大阪大学博士課程海外支援派遣事業に採択され、交通費や宿泊費等の支援を受けることができた。

ご指導・引率して下さった辛島先生と、申請書類の作成にあたりアドバイスをくださった文学研究科研究推進室の皆さんに、まずはお礼を申し上げたい。(鹿野・中山)

(1) 鹿野報告とThe National Library of Australia

鹿野は同Conferenceにおいて“Danshou”: Representation and Sexuality in Modern Japanと題するプレゼンテーションを行った。報告では、戦前戦後の「男娼」と呼ばれる、主に男性客を対象に性的サービスを行うセックスワーカーについて、そのセクシュアリティと男娼像の変遷について取り扱った。具体的には、各時代の雑誌や新聞記事に登場する男娼の事例から、今日の男性同性愛(者)の枠に収まらない男娼のセクシュアリティの多様性について紹介した。その上で、近代に西洋から輸入され定着した従来のセクシュアリティ概念について、前近代から続く日本の性を捉えることの限界について指摘した。

その後の質疑応答では、重要なコメントやご指摘を数多くいただいた。報告者の語学力の低さも大きく影響していると思われるが、プレゼンの技術的な指南を頂戴した。また内

Australia-Japan Graduate Conference 2015 に参加して（鹿野由行、中山良子）

容に関しては、セクシュアリティ概念とローカリティについて研究のフレームワークの弱さを指摘していただき、今後はさらに研究を深めこれらのご指摘を反映させたいと思う。

翌日はThe National Library of Australiaへ行き、Asian Collectionsの日本を担当されている篠崎まゆみさんに案内していただいた。日本の公共図書館では所蔵されていないような、頒布誌や広告など本以外の様々な資料が保管されており、非常に興味深く見学させていただいた。中でも驚いたのは、Asian Collectionsにはセクシュアリティ研究に関係する資料が豊富に所蔵されていたことである。日本では1950-60年代、商業ゲイ雑誌の登場以前に全国で様々な会員制のサークルが立ち上げられたが、それらの会員誌や、現在も活動する「LGBT」関連の団体の頒布誌などが豊富に蓄積されていた。これらの資料は国内ではその大部分が失われ、ごく一部が時折古書市場に出回る程度であり、これほど揃っていてなおかつ誰でも閲覧が可能な状態であることには驚きを隠せなかった。

（しかの よしゆき 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）

（2）中山報告とAustralian War Memorial

中山は同ConferenceにおいてPostwar Japan's Juvenile Delinquency Policy and "Taiyouzoku"と題するプレゼンテーションを行った。1956年に生じた太陽族の社会問題化を当時の非行政策に引きつけて考えた発表で、今考えても不十分なものであったが、発表時に頂いた指摘を生かし、博士論文に結びつけたつもりである。大変貴重な体験をさせていただいた。

また、個人的には1つ課題をもって、オーストラリアに向かった。それはオーストラリアにおいて東京電力福島第一原子力発電所の事故をめぐる問題がどのように報道されているのか、という問題である。もちろん報道に関してだけでなく、今回の滞在で出会った現地の研究者の方と、被曝をめぐる問題に関しても様々な話をする事が出来た。

オーストラリアという国自身は、原子力発電の燃料であるウランの輸出国であるにもかかわらず、原子力発電所を持たない国である。当地の研究者から、オーストラリアは輸出産業としてのウラン鉱を持つが、ウラン採掘をめぐる被曝報道はやはりオーストラリア国内での報道において語られにくい話題であると教えられた。ウラン採掘は、先住民の人々、そして彼ら彼女らの住む土地を被曝に晒しているという。被曝は政策として進められる原子力事業の陰となり、語られることの困難を抱えている。被曝を語ることの困難は、日本とオーストラリアだけでなく原子力発電を抱えるどの国においても起こりうる問題であろう。

また、今回のconferenceではconference tourの一環としてAustralian War Memorialを訪問した。まだ皆さんの記憶に新しいと思うが、2015年は集団的自衛権をめぐる国会で

の攻防がなされた年である。

Conferenceで出会ったオーストラリア国立大学の院生であるLen Morrisさんは、私に「オーストラリアの歴史は、集団的自衛権の歴史です」というひと声をかけてくれた。その一言はAustralian War Memorialの展示を見る際に、これからの日本で語られる集団的自衛権、そして集団的自衛権の下に生じるかもしれない死者が、どのように国というフィルターを通して語られるのかについて考える重要な契機を与えてくれた。

Australian War Memorialはキャンベラにある国会議事堂から、一直線にひかれた大きな道路を隔てて対置する形で創られている。Australian War Memorialの正面は、国会議事堂の正面に対座している。その都市計画的な配置そのものも、国と国が語る戦死者との関係を物語る。

Australian War Memorialは、Hall of memoryをその中心として多くの展示室が配置されている。Hall of memoryは宗教的建築物のようなドーム状の空間を持ち、その内部には無名戦士者のための墓標、陸海空軍の軍人や従軍看護師がデザインされたスタンドグラス、同じく陸海空軍の戦死者を称えるモザイクタイル等が配置されている。

これらの展示物を前に、軍神という言葉は私は思い起こした。宗教画のような陸海空軍の軍人のイメージは、私がこれまでに日本学で見聞きしてきた一人一人の戦死者の姿とはあまりにも大きく異なった。戦死者があたかも聖人のように国に表象される空間の存在と、この空間が国会の正面に対峙することを必要とするこの国の政治。誰の、何のためのこのデザインなのか。何を肯定し、自明とし、この空間は存在するのか。戦死者をめぐる表象は、多くの問いを私に投げかけた。ホールの外に出ると、壁に刻まれた戦死者一人一人の名前を録音された子どもが読み上げる声が聞こえてきた。戦死者と、今生きている子どもとを結びつけるような表現がAustralian War Memorialという空間に成立していた。

展示室では第一次世界大戦はもちろん、初の直接の戦争となった日本との戦争をめぐる展示、そして国連の「平和維持」の活動において亡くなった死者をめぐる展示など、多くの戦死者にまつわる話や物の展示がなされていた。また、各々の資料の前で退役軍人がそれらの展示に解説を加えていた。たくさん子どもたちが学校の先生と共にこれらの展示を見ていた。子ども用展示ゾーンも設けられ、子どもたちは過去の戦場を模した空間において、塹壕やヘリコプターのコックピットを体験することが出来た。自分が今まで体験してきた戦場という空間の語られ方、体感のされ方との違いに、私の頭は混乱を極めた。

集団的自衛権の下に語られる戦死者と向かい合う空間が設けられる都市に、私は居た。戦死者に対峙した、というよりも、オーストラリアという国が表わす何かに出会ったのだと思った。これから日本という国が、集団的自衛権の下に生じる死者をどのように語るのかを考えた。このままでは、そう遠くない未来に起こりうる出来事。自分はどう対峙する

Australia-Japan Graduate Conference 2015 に参加して（鹿野由行、中山良子）

のか。これからも考えていきたい。

（なかやま よしこ 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）

注

- 1) 黛友明、ファクンド・ガラシーノ、鳥居大嗣「Australia-Japan Graduate Conference 2014 参加記」『日本学報』第34号、2015年。